OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂の孝子顕彰運動（三）：中井竹山・履軒を中心に（下）
Author(s)	佐野, 大介
Citation	懐徳堂研究. 2019, 10, p. 43-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75937
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂の孝子顕彰運動（三）
──中井竹山・履軒を中心に（下）──

佐野大介

はじめに

本稿は、拙稿「懐徳堂の孝子顕彰運動　―中井甃庵・五井蘭洲を中心に―」（『懐徳』第八五号、二〇一七年）・「懐徳堂の孝子顕彰運動（二）　―中井竹山・履軒を中心に（上）―」（『懐徳堂研究』第九号、二〇一八年）の続稿である。

一、『よしはら物語』

『よしはら物語』（吉原物語）とは、明和四年（一七六七）に成立し、『扶桑残葉集』や『遺文集覧』といった叢書に収録された、当世難波の孝女きよの孝行譚である。原本の所在が不詳であることもあり、長らく作者に関して疑義が提出されていたが、近年、天野聡一氏により中井竹山の作であることが明らかとなった[1]。天野氏による梗概を下に引用する。

> 難波の新町にあるよしはらという界隈に清という娘がいた。清が十五歳の夏、養父・伊兵衛が眼を病み、清は治療のために身を売ろうとする。ところが、ここにいたって清の実母と同居していた男が伊兵衛を人売りと罵り騒ぎ、また善七という男が清の兄であるとにわかに名乗り出てきて清を引き取ろうとする。住人達は清の身代金目当てだろうと推量し、清は奉行所に届け出る。その年の十月、甲斐の君のお裁きがあり、実母と善七は罪を咎められ、清はその志を褒められた。この一件は江戸にも報告され、今年の三月四日に銀百五十両が授けられた。やがて伊

兵衛の眼病も治り、清の孝行は町中の評判となった。

この話を聞いたある男は清に面会しようと四月望日に家を訪ねるが、会えない。翌日も会えなかったが、清の親が清を男のもとに連れて行く約束をし、ようやく会える。実際に細々と話を聞いてみると、世間で言われているのとは異なる節もまじっており、大変優れていることが多い。この素晴らしい美談は世の掟ともなるだろうと、ことの次第を書きつづった。明和四年四月「かずよし」が記す。(2)

天野氏は『よしはら物語』に関して、「竹山は明和期に積極的な孝子顕彰活動を行っていた。明和四（一七六七）年の『よしはら物語』執筆もその一環として理解すべきであろう」（天野氏前掲論文）と結論づけている。

他の顕彰活動との関係に関して、当時懐徳堂のごく身近な地域で既に評判となっていた孝子に取材したという点では、甃庵『五孝子伝』との共通性を指摘し得る。教育という観点からは、生徒たちにとって、日ごろ聞き馴染んだ例は、実感を持ったものであったであろう。

また、実際に面会するために孝子本人を訪ねるという点では、『むかしの旅』の例に似る。顕彰・教化といった社会的意義は勿論のこと、「民間の孝子順孫の事状」を聞くのを好んだ竹山の、自身の興味・嗜好を満たすという一面もあったと思われる。

『よしはら物語』は、懐徳堂の孝子顕彰活動に関する研究においても、今後、顕彰・教化・嗜好といった各面から検討されるべき資料であるといえよう。

二、「熊馬二童伝」

竹山の文集・詩集である『簣陰集』にはいくつか評伝が見えるが、その一つに「熊馬二童伝」（天明六年（一七八六））なる評伝がある。(3)これは、大阪天満の籠造りの兄弟の孝状を記したものである。紹介も兼ね、以下に全文の書き下しを載す。

蓋し大阪府天満の郷、籃工の子熊馬兄弟有り。孝勤を以て著わに称せらると云。其の父窶にして且つ明を喪うも、佗（ほか）無く以て生を為す。勉強して摸索し、以て旧業を理む。旁（よ）りて妻に慕い、及びに熊児之を佐く。糠覈屢る絶ゆるは二歳にして死す。熊自ら謂えらく、小腕壮事に任じ難し。然れども力を勤めて人に兼ぬれば、豈に以て母を養うべからざらんや、と。乃ち子に臥し寅に起き、専心竭力し、亡何にし

て刀斧を揮い巨竹を剖ること、壮者と異ならず。馬方に髣髴にして、亦能く之を佐け、矻矻として倦まず。二人平居して絶えて童心無し。良辰美日と雖も、未だ嘗て嬉遊せず。衣食屋當い、因りて厝辨を得。母宿憂を諼る。母癒ゆれば則ち二人更に湯薬を侍し腰支を摩す。或いは徹暁して眠らず、以て功力を償う。又一孩弟を撫して、友愛切至なり。母益ます之に安んず。東衙の一吏人、出入し其の肆を過ぐる毎に、二人の籃を治むるに微怠亡きを見る。心之を異とし、一日就きて籃を買い、因りて銭数陌を予えて、曰く、詰旦且く場を観、以て労を弛めよ、と。次日之を過ぐるに、業を執ること自若たり。之に詰う。熊謝して曰く、八月初吉邇きに在り。是れ衆工の暇日。今閑に一日を度するは、志に非ざるなり。先父の周忌今冬に係る。昔日の厚庇に、資を留め追薦するは、実に母子の至願なり、と。吏人感動し、遂に委曲訪問し、以て本衙に白す。本衙状を以て聞き、命じて銀錠三十枚を賜い、以て之を旌す。実に天明五年乙巳十二月なり。時に熊十有四歳、馬十歳。府帥阿部侯、亦前後に銀十五枚、棉布二十端を賜う。府下喧伝して以て盛事と為し、往観する者堵の如し。士庶贈遺すること接武なり。或いは償を増して其の製を取り、号して孝籃と曰う。予時に内艱に丁り、存問する遑あらず。次年丙午の夏、為に微奨を加え、召して之に見ゆ。熊は敦敏和易、質にして野ならず。馬は慎嘿にして目光炯然たり。望みて其の非凡なる器を知る。噫嘻府人侈靡の風、業を惰り行を敗る。父母罹いを詒す者、往往にして然り。今斯の二童を得るは、亦奇ならざるか。乃ち画師に命じて貌焉を取らしめ、今茲の丁未の秋、服除せば則ち裱褙し、以て斎壁に挂け、庠中幼子童孫に観感興起する所有らしむ。

賛に曰く、耕稼陶漁、上世摸を立つ。籃工孳孳たり、維れ舜の徒。(4)

先の「よしはら物語」同様、懐徳堂の顕彰運動によって初めて名を著されたのではなく、既に名を知られた孝子として竹山自身が面会したことや、熊馬兄弟を教材として懐徳堂で童蒙教育に活用したことなどが記されている。

また、翌天明七年（一七八七）には、「与熊馬二児扁額并後題」を撰しており、これも『奠陰集』に収録されている。(5)

熊馬二難の廬

府下天満の郷、籃工の児、長は熊次は馬。其の父明を喪い、数年にして死す。家汚にして烟絶ゆ。二児能く遺業に力め、以て母を養う。孝友篤至にして、勤苦罕比なり。天明五年乙巳季冬、旌賞を膺く。時に熊十四歳、馬十歳。四方哄伝し、傾動せざるなし。前程邈たり。慎しみて廃墜する勿かれ。丙午首夏、書し以て焉に贈る。竹山居士[6]。

竹山が二人に面会したのも「丙午之夏」（天明六年（一七八六））であるから、この際かもしくはその後すぐに扁額を書して贈ったのであろう。

既に評判となった孝子に対しては、懐徳堂が積極的に援助・顕彰する必要性は低いのだが、そういった際も、近所であれば、自身の興味を充たすことも兼ねて孝子を訪問し、幾ばくかの援助や評伝作成を行なうとともに、「庠中幼子童孫」への徳育に役立ててゆくというものが竹山の手法だったといえよう。

三、「孝子万吉小伝」

鈴鹿の万吉は、寛政年間に世間で大いに評判となった孝子である。懐徳堂との直接の関係としては、『懐徳堂考』に寛政九年（一七九七）に万吉を懐徳堂に招いたことが記されている[7]。万吉は天明七年（一七八七）に、既に道中奉行桑原伊予守より公的に褒賞を受けたのをはじめ、懐徳堂訪問以前に幕藩民間を問わず多くの人々より金品や褒賞を受けており、懐徳堂は既に世に知られた孝子として万吉を招いたといえる。

万吉の行状を記したものとしては、刊本である植村康済『勢州鈴鹿孝子万吉伝』（皇都書舗脇阪正兵衛他、寛政元年（一七八九）己酉夏五月、以下『植村版』）が広く行なわれたが、森銑三氏は、「なほ三橋成烈の著した『孝子万吉伝』には、忠房の万吉のことを書いた一文が附録に添うてゐるが、これは涙なしには読み得られぬものである。鈴鹿峠の孝子万吉を初めて世に紹介したのは、実に忠房だつたのである。成烈の右の著は写本を以て伝へられ、やはり『視聴草』にも収められてゐるが、忠房と成烈との記を要約して書いたのに過ぎない刊本の『孝子万吉伝』（引用者注…『植村版』を指す）のみが広く行はれて、成烈の著を知る人の少いのが遺憾である[8]」として、三橋成烈『勢州鈴鹿山麓孝子万吉伝』（天明五年（一七八五）十月、石川忠房「万吉伝附録」を附す、以下『三橋版』）が万吉評伝の先駆けであったとする[9]。

ここで言及されている「忠房」とは、万吉が孝子として世に知られるきっかけを作った旗本、石川忠房である[10]。天明三年（一七八三）鈴鹿峠を通りかかった忠房は、万吉と出会いその実直な行動に感心するとともに、万吉が孝子であるとの評判を聞きつけ、その母親とも面会する。忠房は万吉の孝状を三橋成烈に告げ、万吉を訪問するよう勧める。それを受け、成烈は天明四年（一七八四）に大阪に登る際と翌年の帰郷の際に万吉を訪ねその孝行ぶりを確認し、同年（一七八五）忠房の勧めにより『勢州鈴鹿山麓孝子万吉伝』を撰した。万吉の評伝は、どれも孝行自体の描写は比較的少なく、主に忠房が万吉と出会い顕彰してゆく経過が記されているのだが、このこともこういった成立事情が影響しているのであろう。

該書撰述に至る経緯は『三橋版』に、

> 忠房猶も人に語り、彼が孝徳を世に弘め且人の子たる者の鑑にもせまほし、此の事しるしてよとあれど、初め足下の見出し給ひぬる孝子なれば、足下こそ筆とり給ひねと言ひしかど、一人より二人見聞きたるが全ければ、しひてとあるに、いなび難くて、年年に見聞き及びたる事を拙き詞にしるし侍る。

と記されている。このように、石川忠房及び三橋成烈両人の知見を合わせ成立した『三橋版』は、万吉顕彰の嚆矢ではあったが、写本であり部数も限られたものであったと考えられる。忠房の万吉顕彰について詳細な検証を行なったファン・ステーンパール・ニールス氏は、「そもそも「万吉伝」は「人の子」のためではなく、顕彰にともに関わる「同志」のために作成されたとしか考えられないような流通・利用の実態を見せている」（ニールス氏前掲稿）として、忠房らにとって「孝子顕彰そのものが自分の志を表現する「場」であり」、広く民衆を教化することに特化した活動ではなかったことを指摘している[11]。これに対して『植村版』は、販売するために刊本として刷られたものであったため、その目的からも流通径路からもより広く世に伝わったのであろう。

なお、また万吉伝を載す『近世孝子伝』に、

> 石川忠房浪華にありし時に万吉の事を杉浦某に語れは某また講筵にて之を子弟に語るに挙座感泣せざるはなかりしとぞ

とある。万吉が孝子として名を博した原因としては、評伝が多くの人の手に渡ったこととともに、このような、

個人的なネットワークや講義といった形での、口頭による伝達も大きな力があったものと思われる。

これらの顕彰により、万吉は「その名は江戸・京坂にまで伝えられ、勢州鈴鹿孝子万吉伝はじめ数種の伝記、官撰孝義録記載の略伝あり、ついに鈴鹿峠の名物男として諸大名・幕府の有司などまで東海道の往還に万吉の家を訪れ、金品を下賜する有様であった[12]」、「たとえば鈴鹿孝子万吉のように学者や大名たちが往還のさい、万吉をみることを語り草とするような「孝子スター」さえも生みだされ[13]」などとされるような著名人となっていった。

天明期を代表する文人で、幕府編集の『孝義録』の編者も務めた大田南畝の随筆『一話一言』にも、「鈴鹿孝子伝」なる万吉評伝が収録されているのだが、その末尾に、

> 此孝子東都に来りて馬喰町馬場駿河屋甚助方に宿り居れり、予これに見へんとて行しが、其日は他に出しとてあはでやみき。（『一話一言』巻三）[14]

と、南畝自身が面会を希望していたことが記されており、表彰のために訪れた江戸（天明七年三月四日）での万吉の人気ぶりが見てとれる。

寛政元年（一七八九）の冬、大坂を訪れた万吉を京都の儒者若槻幾斎が懐徳堂に案内し、竹山と万吉との会見が成立した。この訪問について、『懐徳堂考』は、

> 鈴鹿の孝子万吉を懐徳堂に招きて之を講堂に延き、生徒を聚めて会見せしめ、席上饅頭を出し、万吉をして手づから生徒に頒ちて其の孝行にあやからしめ（『懐徳堂考』下）[15]

と記しており、まさに「孝子スター」というに相応しい取り扱いであった。自身とともに生徒も会見に同席させたところに、この会見が教育機関としての懐徳堂の徳育実践の一環であったことが示されている。

この会見の後、竹山は「孝子万吉小伝[16]」（万吉の孝状と褒賞の状況とを簡潔に記した後に万吉図の賛を附す）を撰している。

> 鈴鹿山下の童万吉、四歳にして孤なり。母善く病み、寡居して之を撫すも、幾ど自存する能はず。隣人久平、善く之を視、餧えざるを得。万甫め六歳、既に其の憂いを知る。家は山址官道に在れば、乃ち日び行客に懇めて、軽嚢微橐を荷い、一蓑笠小柴戟の若

きも、送りて山嶺に至り、因りて数銭を要む。登降晷を窮め、以て其の養を助く。終年未だ嘗て嬉遊せず。母疾動あれば、日夕輒ち扶持し、食を作り薬を市うこと、屹として成人の如し。衆皆焉を嗟賞す。天明中、天下連年凶饑あり。万益ます勤苦するも、日に必ず少米を得て以て進む。母未だ食わざれば、己敢て食わず。癸卯秋、東人石川氏、其の僚と還るに大坂護曹よりす。途みち万の挙止を異とし、廬に就き廉問し、殫く其の実を得。僉感動資給し、已にして還り益ます庶僚に告げ、力を勠せて周く卹む。聞く者或いは誦を作り之を鳴らし、名遂に著称せらる。乙巳夏、冷泉君日光幣使と為り、廬を造りて賞賚す。丁未春、邑宰状を以て聞き、官乃ち万を召し、銀錠二十枚を錫い、又命ちて歳さい廩給するに、母の身を終うるを以てす。万時に年十有二。戊申夏、執政白川侯、上国を巡視し、万を関駅に召見し、白金を錫う。寛政已酉冬、久平万を拉き大阪に来る。友人子寅、導きて吾が庠に至り、相見ゆるを得。府帥佐倉侯、之を聞きて諸を副邸へ召し、食及び布帛を賜う。万の至るや、予画人子温をして、座貌に就きて焉を取らしめ、因りて系くるに賛を以てす。其の辞に曰く、

鈴山の険、童は僕賃し、艱辛し母に供す。厥の未だ齕せざるより、歳行の周きこと、孜孜として力を竭す。天石子を誘い、克く幽側を燭らせしむ。旌典閭に及び、朝紳枉げて軒す。聞かしむこと電馳にして、府下哄然たり。邂逅何れの夕か、我心則ち降る。命じて其の真を写し、風容を宛示せしむ。上相は熊軾し、嘗に優奨を加う。帥台は今日、申ぬるに寵賞を以てす。陸橘呉蚊、生孝夷に匪ざるも、我万吉を瞻るに、幼蹟更に奇なり。

己酉仲冬　竹山居士撰

僕賃　『左氏』申鮮虞、野に僕賃す。
匪夷　『易』夷の思う所に匪ず。(17)

余談乍ら、当世の医者橘南谿（一七五三―一八〇五）の随筆『北窓瑣談』には、万吉のその後について触れられている。

鈴鹿の孝子のごとき幼年の時は、其名高く公よりも褒美し給ひけるが、年長じて後は穢行多く、又博奕さへ好みて、万づ常人にだも、其行ひ及びがたければ、其里の庄屋など、公の咎めを恐れて、とかく異見を加へけれども、更に聞入れずと風説有しが、い

かゞなりしや。……人始あらざる事なし。よく終ある事すくなしといふ古語も思ひ合されし。（『北窓瑣談』巻三）[18]

幼い頃孝子として名高かった万吉も、成長して後は凡人にも劣る行状であったとのことだが、南谿も「風説」と記しており、確かなことは分からない。

さらに、明治期の随筆『桜斎随筆』に、

廿三、高名なる孝子万吉は四十六歳の時母死し文政四年江州信楽代官所へ足軽に召出され万延元年庚申八十五歳にて死す旧莫不より孝ハ百徳の本とて徳本と云名字を賜る子孫江州信楽に在り坂の下にハ活しと云々（『桜斎随筆』第五二冊巻四六）[19]

とあり、後世に至るも、その子孫にまで関心が及んでいた様子が窺える。

四、「錫類紀」

『懐徳堂考』に、竹山による孝子顕彰として、

或は豊後杵築の孝女初が手織の木綿にて、孝女初手製の字を染め抜きし手拭を製して人に頒ちしこともあり。（『懐徳堂考』下巻）[20]

と記されている孝女はつ（孝女初）は、豊後の人である。[21]豊後の学者三浦梅園の記した孝行譚集である『愉婉録』に、懐徳堂がはつに募金を送ったことが記されている。

郡監綾部妥胤（やすたね）（華名文右衛門）は、はつが久しくつかへし主人なり。妥胤、安永丙申の冬、国の事有て大坂にゆかれしに、大坂学校懐徳堂の教授中井竹山先生より、かの初に贈物有て其事を嘉しられたり。それを謝するとて、初手拭ひとつ妥胤の使に託して、かの先生に遣しける。先生孝子の贈物とて大に悦、明て正月廿日、其家の節会とて、親族旧識門人など百数十人集り、文よみ詩作り、酒などたうべて遊ぶ事なりしに、其日の手水場には、山城なる川島村儀兵衛が家の竹にて手拭かけを作り、かのてのぐひに自ら「豊後杵築孝女初手製」と書てかけたり。妥胤も其日の賓に預れり。竹山衆賓を揖し、かの帨架をしめし、「是みな孝子の贈物なり。殊にけふの賓妥

胤は、孝子のみやづかへし主人なり。いざよりてまのあたり其孝状を聞給へ」と有しかば、満堂の衆賓まど居してこれをきき、皆嘆称せしは、また孝女の栄にあらずや。（『愉婉録』[22]）

このエピソードの後には、続いて竹山が義兵衛を称えた漢詩「孝子義画像引」（『奠陰集』詩巻四[23]）が引用されている。先の『懐徳堂考』の記述はこの正月節会のことを記したものである。ここから、安永丙申（五年（一七七六））以前に、懐徳堂がはつに贈物をしていたことが分かる。

また中井履軒には、はつの行状を記した「錫類記」（『敝帚続編』[24]）という作品があり、その梗概は以下のようなものである。

はつは幼い頃父と死別し、病気の母と二人暮らしであった。病気で働けない母の代りに、七・八歳のころより物売りなどして生計を立てる。一六歳のころ、その孝行が認められ、藩主より褒賞を受ける。

その孝行ぶりは以下のようなものであった。ある時、母の病気が重くなり、食欲がなくなった。母が塩辛に酒塩（塩を酒にといたもの）を振ったものなら食べられそうだと告げると、はつは深夜にもかかわらず買いに出かける。深夜であったが、偶然が重なって魚屋・酒屋が就寝しておらず塩辛・酒を購入できた。

母親の死去の後、はつ親子を気に掛け、ずっと住居を貸していた家主の定七が病気になったため、はつは定七と同居し、まるで本当の親子のように身の回りの世話をする。だが、定七も程なく病により死亡する。

そのうち、藩主より再度の褒賞に預かったが、その褒美もすべて母の墓と祖母の墓とを建てるために使った。

定七はもともとはつを一人息子の嫁にと望んでいたのだが、息子和吉は賭博を好み素行が不良であったため、結局定七に勘当される。その後、和七は行方を眩ませてしまっていた。

ある日、その和吉がはつの元にやって来て、自分は心を入れ替えたと告げ、蓄えた金をはつに手渡す。はつは返そうとするのだが、和吉は感謝の言葉を述べ、決して受け取らなかった。

和吉が真人間になったことを喜んだ親戚や郷里の者は、定七の願い通りに和吉とはつとを結婚させる

ことに決め、定七の七回忌が過ぎて後、めでたく二人は夫婦となった。

序の冒頭に『毛詩』（大雅、生民之什「既醉」）を引用して、

詩に曰く、「孝子匱しからず、永く爾が類を錫う」と。信なるかな言や。（「錫類記」[25]）

とあり、題名の「錫類」とはこの「永く爾が類を錫う」を踏まえた言葉であることが分かる[26]。はつの善行が、和吉を改心させたことを表現したものであろう。

さらに、序に、

近日吾聞く所、孝子孝婦旌典を膺け、褒賚を受く。（「錫類記」[27]）

とある。「吾聞く所」とあることから推すに、梅園が藩より褒賞を受けたはつの行状に注目して懐徳堂に伝え、それを受けて竹山が贈物を送るとともに、履軒が「錫類記」を撰したものと考えられる。湯城吉信氏が、「履軒と梅園が文通を開始するのは安永三年になってからのようだ。……両者の文通は孝子顕彰運動を媒介に始まったと考えられる」（湯城氏前掲論文）とするように、孝子顕彰運動は、儒者間のネットワークの構築及び維持に大きな役割を果たしていたといえるであろう。

「錫類記」は、股野玉川編著の孝行譚集である『忠孝成美録』に、高山彦九郎「上州三堀孝子伝」とともに収載されている[28]。竹山が股野玉泉『孝婦鳴盛編』に跋、中村正尊『肥後孝子伝』に序を寄せていることなどと同様に、孝子の情報や孝子に関連した作品が、儒者ネットワークでやりとりされるとともに、こうした孝子顕彰を介した交流が即ちこのネットワークを形成していた様子が窺える[29]。

五、「孝三伝」

この他、履軒の随筆集である『敝帚続編』（大阪大学附属図書館蔵）には、「孝三伝」なる文章が収載されている[30]。これは履軒の手になる上野国の孝子大沢三二郎の評伝である。履軒が遠く上野の人物の伝記を記していることについて、西村天囚は、「履軒敝帚に孝三伝卯谷伝ありて、上野の美談を記し、は、蓋し之を彦九郎に得し者なるべし」[31]とする。上野出身の高山彦九郎と懐徳堂と

の間には夙に交流があり、「高山彦九郎の京攝を過ぐるや、亦必ず竹山を訪へり、彦九郎孝義貞烈を好むこと食色の飲に於けるが如く、竹山履軒も亦善を好むこと食色の如し」（同上）とされる。『高山彦九郎日記』第五巻[32]に竹山から彦九郎に宛てた書翰（安永四年（一七七五）付）が収載されている他、彦九郎の日記には、天明二年（一七八二）、天明三年（一七八三）、寛政三年（一七九一）、寛政四年（一七九二）に竹山・履軒に関する記述が見える[33]。

高山は、「聞人説孝子義僕事、雖遠隩往問之、転述之於人」（頼山陽「高山彦九郎伝」（『高山彦九郎日記』第五巻所収））、「間聞有孝子義奴烈婦、雖迂其途、必往問之」（塩谷宕陰「高山正之伝」（『高山彦九郎日記』第五巻所収））とされるように、忠孝を尊び、孝子義僕と実際に面会することを好んだ。高山はその生涯の多くを旅に過ごしたが、実際その旅の途中で孝子の噂を聞くとその元を訪ねており、これも竹山・履軒兄弟が龍野旅行（『昔の旅』）において、孝子貞婦を訪問したことと通じる[34]。

こういった性情故、自身が「口を極めて人の順良を称す」（『在津紀事』下[35]）と評した竹山・履軒兄弟と通じるところが多かったのであろう。

孝子大沢三二郎、上毛新田牛沢村の人。母に事えて至孝。家貧しく力作す。兄富みて貲多けれど、母則ち三二郎の養に安んじて焉に依る。其れ耕耨して田に在るも、常に母を忘るる能わず。其の心稍や安んずれば、輒ち來耜を捨て、還りて母を省みる。或は晴雨を談じて、復た往く。或は未だ家に至らずして、母を望みて其の閑暢の状を見、而して心安んずれば則ち反る。斯くの如きは日に三四たび。神祠仏宇、時に斎醮有れば、輒ち母を負いて往く。躬は垢弊を服せども、母は鮮美を服せしむ。母年益ます高じ、背に安んずる能わず。乃ち為に竹轎を製り、其の子と之を舁く。母又久しく轎（こし）に坐す能わざれば、則ち或は轎し、或は背（お）う。其の轎を製るや、常様を用いず。乃ち駅道四脚の轎なり。人皆其の諸事に鄭重にして、而れども轎製の麤（あら）きを怪しむ。蓋し母の背に在るや、孫轎を挙げて随う。常様の轎の若く重大なれば、既に対夫無く、独り挙ぐ能わざればなり。其の妻亦孝順。姑出ずれば、必ず薄粥を煮、其の帰るを俟ちて之に哺し、然る後饌飯す。言うこころは老人体を労して或は饑う。随いて硬飯餤（すす）むれば、恐るらく痞塞を致す、と。其れ心を用うるや精細、蓋し皆此れに

類す。嘗て蒲花褥老者に宜しきを聞き、即ち捜索し、躬ら往きて蒲を刈る。既に就くや甚だ佳し。母尤も之を便とす。後三二郎、人の老父母有る者に遇えば、輒ち蒲花褥を説く。曰く、亦為し難からず。唯半日の功を費やすのみ、と。聞く者皆其の太いに易きを疑う。蓋し其の蒲を刈るや、池沢を歴すること数処。三五日を累して方に就す。然るに其の情急切にして、自ら其の労を省かず。故に以て半日と為すのみ。頗る剣術に暁く、好みて長刀を佩ぶ。邑に侠者有り。意毎たび之を快からず。嘗て酒を被り、三二郎と途に遇い、挑みて之と闘う。三二郎辞するに老母を以てすれども、聴かず。直ちに刀を抽きて之を撃つ。三二郎身を躲して突入し、搏みて之を投げ、其の刀を奪い、刀脊を以て連けて之を抶つ。邑人趨りて之を救う。相共に和解して罷む。既にして侠者人に謂いて曰く、三二郎孝子なり。我以て敗るる所以にして、我讐とせず、と。是の後菓餻脯醢、時時三二郎の母に饋るとしか云う。夫れ孝能く豪猾を感ぜしめ、其の寇害の心を喪わしむ。亦盛んならずや。然り侠者亦奇男子と謂うべし。［三二郎の歿、安永壬辰の歳に在り］（『敝帚続編』「孝三伝」[36]）

この「孝三伝」は小品ながら、懐徳堂が広い交流関係を持ち、儒者間のネットワークにおいて活発に活動していたことが窺える資料である。こうした交流のネットワークは、活動と存在とが同義となる。こうした孝子の情報が遣り取りされること、そのこと自体がネットワークを維持・存続させる要因であったといえよう。

六、蒙養篇

この他、孝子評伝以外に中井竹山が撰した孝関連の記述が見られるものに、『蒙養篇』[37]がある。この書は童蒙教育の為の啓蒙書であり、童蒙に対して「人の道」を説くが、中でも冒頭部は孝の解説より始まっている。

父母に善く事ふるを孝といひ、長上に善く事ふるを悌と名付け申候。（第一条）

さらに、第二条以降も孝についての言及が多くみられる。

孝弟之二字は昼夜御心掛候て一生御失念不可有之候。（第二条）

親に事ふるは手足の働第一たるべし。恩愛を恃みて怠り易し能々心を可被用候。（第一六条）

一事を行ふにも親の心に叶はざるかを能々可考。僅の事も一分に任す事必不可有之候。（第三〇条）

この書は啓蒙書として、各種道徳を奨励することに主眼がおかれているため、竹山独自の孝観が述べられているわけではないが、「父母に善く事ふるを孝といひ」（第一条）、「親に事ふる」（第一六条）などから、童蒙に奨励すべき孝の基本として、親に「事える」ことを孝の中核と考えていたことが見てとれる。さらに、「恩愛を恃みて怠り易し」は、『論語集註』の「世俗の親に事うるは、能く養い足る。恩に狎れ愛を恃み、而して其の漸く不敬に流るるを知らず」（為政篇、子游問孝章）を踏まえた表現と考えられ、竹山の孝解釈が、朱子学的理解から大きく外れたものではなかったことが窺えよう。

甃庵『とはずがたり』は、罪の発生の責任を本人のみに求めるのではなく、生育環境（教育の不備）にも求めた[38]。これは甃庵が、孝を単なる天性の発露ではなく、獲得的性質を持つものと捉えることから、教育の必要性を説いたものといえる。また蘭洲は童蒙教育において、妖怪で子供を脅すといった手法に強く反対する[39]。懐徳堂の童蒙・初学者に対する教育への関心が見てとれよう。

上田秋成は自身が学んでいた三宅石庵の頃の懐徳堂を評して、

今橋の学問所、万年先生の時は、さして学問をさすではなしに、むすこを先あづけて、よい事を少（し）でも聞（か）す事のみ（『胆大小心録』[40]）

と述べている[41]。秋成特有の諧謔をこめた表現ではあるが、初期懐徳堂において、初学者に対しては深い学問を教授することよりも、身近な道徳を教えるといった風があったことが分かる。『蒙養篇』は、こうした初期懐徳堂より続く童蒙・道徳教育の流れを汲んだ作品といえるであろう。

注

（1）天野聡一「『続落久保物語』と『よしはら物語』―作者と成立について―」（『近世文藝』第九四号、二〇一一年）参照。天野氏が竹山の作とする根拠は以下のようなもの。『よしはら物語』を、『扶桑残葉集』は蘭洲作、『遺文集覧』は竹山作

とするが、成立した明和四年は蘭洲没後であること。作者署名として「かずよし」とあり、加藤景範『秋霜集』に竹山を「中井かずよしの主」と表記していること。中井木菟麻呂『懐徳堂水哉館先哲遺事』に「竹山ノ和文……『吉原物語』アリ」とあること。竹山「読子常続芳原語詩」（『奠陰集』）に「新坊有孝女清明和丁亥春受旌賞予為著芳原語」とあること、など。氏の挙げる根拠・行論はともに充分に信頼に足るものであり、当該論文の「『よしはら物語』は中井竹山作と考えられるのである」との見解は妥当なものだと考える。

（2）天野氏前掲論文。

（3）『奠陰集』巻一〇。また『近世儒家文集集成』第八巻、一九一―一九二頁。『懐徳堂遺書』第三冊、一六葉表―裏。他に、近藤元弘編『日本虞初新志』巻之一、風詠舎、一八八一年（王三慶主編『日本漢文小説叢刊』第一輯第一冊、台湾学生書局、二〇〇三年、一六八―一六九頁）。

（4）「蓋大阪府天満之郷、有籃工之子熊馬兄弟。以孝勤著称云。其父窶且喪明、無佗以為生。勉強摸索、以理旧業。旁慕妻、及熊児佐之。糠覈屢絶者二歳而死。熊自謂、小腕難任壮事。然勤力兼人、豈不可以養母乎。乃子臥寅起、専心竭力、亡何。揮刀斧剖巨竹、不異壮者。馬方髫齔、亦能佐之、矻矻弗倦。二人平居絶無童心。雖良辰美日、未嘗嬉遊。衣食屋嘗、因得厝辨。母諼宿憂。母癒則二人更侍湯薬摩腰支。或徹暁不眠、以償功力。又撫一孩弟、友愛切至。母益安之。東衙一吏人、出入毎過其肆、見二人治籃亡微怠也。心異之、一日就買籃、因予銭数陌、曰、詰旦且観場、以弛労。次日過之、執業自若。詰之。熊謝曰、八月初吉在邇。是衆工暇日。今閑度一日、非志也。先父周忌係今冬。昔日厚庇、留資追薦、実母子至願。吏人感動、遂委曲訪問、以白本衙。本衙以状聞、命賜銀錠三十枚、以旌之。実天明五年乙巳十二月也。時熊十有四歳、馬十歳。府帥阿部侯、亦前後貺銀十五枚、棉布二十端。府下喧伝以為盛事、往観者如堵。士庶贈遺接武。或増償取其製、号曰孝籃。予時丁内艱、不遑存問。次年丙午之夏、為加微奨、召而見之。熊敦敏和易、質而不野。馬慎嘿而目光炯然。望而知其非凡器也。噫嘻府人侈靡之風、惰業敗行。父母詬罹者、往往而然。今得斯二童、不亦奇乎。乃命画師貌取焉、今茲丁未之秋、服除則裱褙、以挂斎壁、令庠中幼子童孫有所観感興起矣。

賛曰、耕稼陶漁、上世立摸。籃工孳孳、維舜之徒」

（5）『奠陰集』巻一〇。また『近世儒家文集集成』第八巻、一八八頁。『懐徳堂遺書』第四冊、二九葉裏―三〇葉表。

（6）「熊馬二難之廬／府下天満郷、籃工之児、長熊次馬。其父喪明、数年而死。家泣絶烟。二児能力遺業、以養母焉。孝友篤至。勤苦罕比。天明五年乙巳季冬、膺旌賞。時熊十四歳、馬十歳。四方哄伝、莫不傾動。前程邈矣。慎勿廃墜。丙午首夏、書以

贈焉。竹山居士」

（7）『懐徳堂考』下、四四頁。

（8）森銑三「最上徳内」（『学芸史上の人々』第一章、二見書房、一九四三年）。『視聴草』への収載は、十集之八（福井保解題、史籍研究会出版『視聴草』第八巻、内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第二、汲古書院、一九八五年、四四二―四四九頁）に見える。

なお、『植村版』と『三橋版』との関係に関して、『植村版』の跋に、「右万吉伝は、京都御在番三橋氏なる御方の筆記置給ひ、あるつれづれに見せ給ひ、且、往来に物し給ひし事共、つぶさに物語し給ひしを、忘れては益なしと記憶し処、かいつゞりて置ぬ。同志上河氏是を見て、あづさにちりばめ、世の美談となさん事を請ふ。予も願ふ所なれど、「一度尋ねてゆるし給はゞ」などいひて、はたさゞりしに、今は東都に帰り給ひて、尋るに便りなし。はた、此物語の埋れんも、本意ならねば、私にゆるしぬ。もし此書の東にめぐりて見給はん事もあらば、孝子美談にめでて、予が罪をゆるし給はん事をこひねがふのみ。／寛政元年巳酉夏五月　平安植村康済記」（『植村版』）と示されている。

（9）万吉及び『三橋版』については、ファン・ステーンパール・ニールス「近世中期における「孝子」顕彰の実態とその意義」（『京都大学大学院教育学研究科紀要』第五七号、二〇一一年、後に『〈孝子〉という表象　―近世日本道徳文化史の試み―』第二章（ぺりかん社、二〇一七年）に詳しい。

（10）寛政四年・五年（一七九三・一七九四）にロシア使節ラクスマンが来日した際、幕府宣諭使として応対した人物として知られる。

（11）万吉の孝行より顕彰過程の記述に重点が置かれているのは、このことも原因の一つであろう。

（12）伊東多三郎「近世道徳史の一考察」（『国民生活史研究』第五冊、吉川弘文館、一九六二年）。

（13）大阪市立博物館『懐徳堂　―近世大阪の学校―』（大阪市立博物館〈第103回特別展〉図録、一九八六年、二五頁）。

（14）濱田義一郎主編『太田南畝全集』第一六巻、岩波書店、一九八八年、一〇八―一一〇頁。

（15）『奠陰集』巻一〇。また、水田紀久編『奠陰集』近世儒家文集集成第八巻、ぺりかん社、一九八七年、二〇四―二〇五頁。『懐徳堂遺書』第三冊『奠陰集』巻之五、一七葉表―裏。さらに、『日本漢文小説叢刊』第一輯第一冊、二〇七頁に、鈴木尚「紀万吉事」の「附」として収録されている。

（16）『懐徳堂考』下、四四頁。

（17）「鈴鹿山下童万吉、四歳而孤。母善病、寡居撫之、幾不能自存。隣人久平、善視之、得不餒焉。万甫六歳、既知其憂。家在山址官道、乃日懇行客、荷軽嚢微橐、若一蓑笠小槃戟、送至山

嶺、因要数銭。登降窮晷、以助其養。終年未嘗嬉遊。母疾動、日夕輒扶持、作食市薬、屹如成人。衆皆嗟賞焉。天明中、天下連年凶饑。万益勤苦、日必得少米以進。母未食、己不敢食。癸卯秋、東人石川氏、與其僚還自大坂護曹。途異万挙止、就廬廉問、殫得其実。僉感動資給、已還益告庶僚、勠力周卹。聞者或作誦鳴之、名遂著称。乙巳夏、冷泉君為日光幣使、造廬賞賚。丁未春、邑宰以状聞、官乃召万、錫銀錠二十枚、又命歳廩給、以終母身。万時年十有二。戊申夏、執政白川侯、巡視上国、召見万于関駅、錫白金。寛政己酉冬、久平拉万来大阪。友人子寅、導至吾庠、得相見。府帥佐倉侯、聞之召諸副邸、賜食及布帛。万之至也、予命画人子温、就座貌取焉。因系以賛。其辞曰、

鈴山之険、童兮僕賃、艱辛供母。従厥未齔、歳行之周、孜孜竭力。天誘石子、克燭幽側。旌典及閭、朝紳枉軒。令聞電馳、府下哄然。邂逅何夕、我心則降。命寫其真、宛示風容。上相熊軾、嘗加優奨。帥台今日、申以寵賞。陸橘呉蚊、生孝匪夷、我瞻万吉、幼蹟更奇。

乙酉仲冬　　竹山居士撰

僕賃　左氏申鮮虞僕賃于野
匪夷　易匪夷所思」。

なお、最後の二行は語釈で当該語は、『春秋左氏伝』襄公二七年秋九月、及び『易』渙卦の六四に見える。また、「子寅」とは若槻幾斎の字。「佐倉侯」とは堀田正順、下総国佐倉藩二代藩主で当時の大坂城代。「子温」とは部関月の字。

(18) 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成〈第二期〉』一五、吉川弘文館、一九七四年、二一九頁。

(19) 鹿島則孝編著、鹿島則良等編『桜斎随筆』第一六巻（本の供社、二〇〇一年、二四〇頁）。編著者の鹿島則孝は鹿島神宮宮司鹿島家第六六代。原本は序に「明治二十五年四月十五日鹿島則孝誌」とある。

(20) 『懐徳堂考』下、四四頁。

(21) 拙稿「中井履軒「錫類記」及び孝女はつ関連文献について」（『懐徳堂センター報』二〇〇六、二〇〇六年）参照。

(22) 本稿は『梅園全集』下巻（梅園会編、一九一二年）を底本としたが、湯城吉信氏が、三浦梅園自筆・初稿本「愉婉録」は、引用冒頭部を、「郡監綾部妥胤（華名文左ヱ門）ハは初か久しくつかへし主人なり。妥胤安永丙申の冬、国の事有て大坂にゆかれしに、大坂学校懐徳堂の教授中井竹山はかねてしれる人にて彼にても先たつて初か孝状もきかれ、其弟履軒錫類記とて其事もしるされ、竹山先生よりかの初に贈り物有て其事を嘉しられたり」（傍点引用者）に作ることを指摘している（湯城吉信「三浦梅園あての中井履軒書簡」『懐徳堂センター報』二〇〇九、二〇〇九年）。

(23) 『懐徳堂遺書』第一冊、七葉表―裏。

（24）大阪大学附属図書館懐徳堂文庫蔵。また関儀一郎編『続日本儒林叢書』第三冊、東洋図書刊行会、一九三二年、三九―四二頁。

（25）「詩曰、孝子不匱、永錫爾類、信哉言乎」。

（26）当該部の鄭箋に、「孝子の行ない、竭極の時有るに非ず、長く以て女の族類を錫与す。之を広めて以て天下に教道するを謂うなり（孝子之行、非有竭極之時、長以錫与女之族類。謂広之以教道天下也）」とある。

（27）「近日吾所聞、孝子孝婦膺旌典、受褒賚」。

（28）この他、『日本虞初新志』巻之一、二〇〇三年、一八四―一八六頁。

（29）中井竹山「肥後孝子伝序」（『奠陰集』巻一〇。『懐徳堂遺書』第三冊、一五葉裏―一六葉裏。また武藤厳男等編『肥後文献叢書』第四巻、隆文館、一九〇九年、一―二頁）。『孝婦鳴盛編』に関しては前稿「懐徳堂の孝子顕彰運動（二）―中井竹山・履軒を中心に（上）―」を参照。

（30）大阪大学附属図書館懐徳堂文庫蔵。また関儀一郎編『続日本儒林叢書』（東洋図書刊行会、一九三〇年、四二―四三頁）。なお、『日本虞初新志』は目次には巻之六に「孝三伝　中井積徳」と見えるが三巻以降の本文を有さない。『日本漢文小説叢刊』に附された「《日本虞初新志》日文出版説明」に、「本書は説明によると七巻七冊あるというが、今日見ることのできるのはわずかに初めの二冊だけである。売れ行きがよくなかったためか、あるいは他の理由によって再び続刊しなかったのであろう」（『日本漢文小説叢刊』第一輯第一冊、一三九―一四〇頁）とある。

（31）『懐徳堂考』下、四七頁。

（32）千々和実・萩原進編『高山彦九郎日記』第五巻、西北出版、一九七八年、二〇六頁。

（33）太田市教育委員会教育部文化財課作成「太田市立　高山彦九郎記念館」ホームページ（http://www5.wind.ne.jp/hikokuro/koyuroku.htm）「高山彦九郎交遊録」「高山彦九郎関連人物一覧表」参照（二〇一八年九月一八日確認）。

（34）例えば、寛政二年七月六日には、久慈郡岩手村の孝子音吉（一部乙吉表記）及びその孝状を作成した木村謙次を訪ね、孝状を日記に書写している（『高山彦九郎日記』「北行日記」）。また、安永六年四月一三日には、駿府の孝子八助と面会したとある（『高山彦九郎日記』「丁酉春旅」）。

（35）「上野の人高山正之来つて河伯潜が家に寓し、……且つ曰く。「履軒兄弟口を極めて人の順良を称す……」」（多治比郁夫等校注『当代江戸百化物　在津紀事　仮名世説』新日本古典文学大系九七、岩波書店、二四五頁）。

（36）「孝子大沢三二郎、上毛新田牛沢村人。事母至孝。家貧力作。兄富而多貲、母則安於三二郎之養而依焉。其耕耨在田、常不

能忘母。其心稍不安、輒捨來耜、還省母。或談晴雨、而復往焉。或未至家、望母見其閑暢之狀、而心安則反焉。如斯者日三四。神祠仏宇、時有斎醮、輒負母而往。及春花秋月、唯母所欲往。躬服垢弊、而母服鮮美。母年益高、不能安于背。乃為製竹轎、與其子舁之。母又不能久坐轎、則或轎焉、或背焉。其製轎、不用常様。乃驛道四脚轎矣。人皆怪其諸事鄭重、而轎製之麤也。蓋母之在背、孫挙轎而随。若常様轎重大、既無対夫、不能独挙也。其妻亦孝順。姑出、必煮薄粥、俟其帰而哺之、然後饌飯。言老人労体或饑。随餤硬飯、恐致痞塞。其用心精細、蓋皆類乎此。嘗聞蒲花褥宜老者、即捜索焉、躬往刈蒲。既就甚佳。母尤便之。後三二郎、遇人有老父母者、輒説蒲花褥。曰、亦不難為。唯費半日功而已。聞者皆疑其太易也。蓋其刈蒲也、歴池沢数処。類三五日方就。然其情急切、不自省其労。故以為半日已。頗暁剣術、好佩長刀。邑有侠者。意毎弗快之。嘗被酒、遇三二郎于途、挑而闘之。三二郎辞以老母、弗聴。直抽刀撃之。三二郎躲身突入、搏而投之、奪其刀、以刀脊連扶之。邑人趨而救之。相共和解而罷。既而侠者謂人曰、三二郎孝子也。我所以敗、我弗讎焉。是後菓餌脯醢、時時饋三二郎之母云。夫孝能感乎豪猾、喪其寇害之心。不亦盛乎。然侠者亦可謂奇男子矣。[三二郎之歿。在安永壬辰歳]」（括弧内割注）。

(37) 大阪大学附属図書館懐徳堂文庫蔵。『蒙養篇』については、拙稿「『蒙養篇』諸本間の異同について 附校合記」（『懐徳』第七三号、二〇〇五年）参照。

(38) 拙稿「懐徳堂の孝子顕彰運動 ―中井甃庵・五井蘭洲を中心に―」（『懐徳』第八五号、二〇一七年）参照。

(39) 拙稿「懐徳堂無鬼論における中井竹山「ムクリコクリノ説答千秋」」（『中国研究集刊』嵬号（総第五三号、二〇一一年）参照。

(40) 中村幸彦校注『上田秋成集』（日本古典文学大系五六、岩波書店、一九五九年、二八六頁）。

(41) 「中井竹山・履軒とほぼ同年輩で懐徳堂に学び、その体験を含む随筆を『胆大小心録』として晩年にまとめている」（湯浅邦弘編著『増補改訂版 懐徳堂事典』「上田秋成」条、大阪大学出版会、二〇一六年、二〇〇頁）。